

ヘルマン・ヘッセと第一次世界大戦

有 井 洋 司

*

本箱に四巻の『ヘッセ書簡集』が収まっている。これを読むにあたって、次のようなことが頭の中を去来した。他人の日記や手紙を見るのは、秘密を暴くようで、罪悪感が付きまとう。ヘッセは自分の手紙が他人の目に触れるとは、よもや思ってもいなかっただろう。今回第1巻(672ページ)の凡そ90%位を資料として使った。母親マリーの日記と手紙を姉のアデーレが刊行している。¹⁾ さらに例えば『ヘッセ-マン往復書簡集』²⁾の形体で他に「往復書簡集」なるものが多数編纂されている。最新のものには妻ニノンの編集による書簡集³⁾がある。このような事情を考慮すると、ヘッセは自分のすべてを世間にさらけ出している、ということになる。もしもこれらの日記や手紙が存在しなかったら、ヘッセという人物を作品の中だけで特定しても、その輪郭はぼやけてしまうだろう。逆にそれが存在するから、極めて明確な像が把握できる。観察の過程でこれまで見られなかった新たな一面が加味されたり、あるいは、知ったばかりにイメージが損なわれるということを経験した。何かしら複雑な心境と本能的な興味のようなものが混在していた。

『ヘッセ書簡集』4巻中の第1巻は1895年から1921年までの手紙が収録されている、つまり18歳から44歳までの期間のものである。2002年は生誕125

年という節目で、前回の人文論叢⁴⁾で1914年まで、つまり学校を退学し、結婚するまでの期間を集中的に観ることにより、危機といわれる周辺を探ってみた。1914年以後も内容は異なるけれど、大変困難な時代を経験することを余儀なくされた。そのため読者から厳しい目を向けられるだけでなく友人、知人そして出版社からまでも避けられるようになり、自分を理解してくれる人は、ロマン・ロランとテオドール・ホイストコンラート・ハウスマンだけだと告白せざるを得ないような体験をする。それでも尚、収録された手紙のこの多さは、一体どう解釈すればいいのだろう。

ヘッセは『車輪の下』そのままに、自ら生命を奪いかねない状況が生じたが、結局『ペーター・カーメント』の大成功で世間並みの人生を送れるようになり、念願の詩人として、詩人を職業として生活できるようになった。驚異的な本の売り上げを記録しながら、順風万歩の人生を送ったかのように思われがちだが、『車輪の下』以上の苦悩を味わわねばならなくなる。それが上述の1904年から1919年までの長い期間である。

またこの期間だけでも、自分の作品について、あるいは文学観について述べているカ所がかなりあるけれど、今回の資料としては不要なので、作品論を対象とする時のために譲ることにする。専ら生活環境、家族と家庭、そして戦争というような項目について集中的に観て、そこから描き出されるヘッセの姿を捕えてみたいと思う。この期間の設定は筆者の方針によるものである。

*

「私は今妻とガイエンホーフエンの農家に年150マルクの家賃で住んでいる。ここの生活は孤独で素朴だ。しかし詩的—牧歌的と呼ぶようなものでは必ずしもない。だから何か必要なものがあるとすぐに、シュテックボルンへ舟を漕いで行き、そこで買い物をしなければならない」(123)

ヘッセは妻と「ルソー的実験」⁵⁾を始めた。素朴な造りのこの家は、年150マルクというだけあって、30年戦争の時のもので状態はかなり悪く二人で住む前に、ヘッセは数週間かけて整備している。ここでヘッセは文学の仕事に携わり、マリアは家政と音楽と写真に時間を割くことになる。このように求めて住んだガイエンホーフェンの生活は厳しく、水道も、衛生設備も、鉄道も無く、ただワインだけは豊富なのだがヘッセにはその酸っぱさが難点で、これだけは取り寄せていた。Birgitはこの生活を物語風にアレンジして、「二人が夜、暖かい部屋に座り、ヘッセが白ワインを飲んでいて、猫のガッターメラタがタイル張りのオープンの穴の中でゴロゴロ鳴いている」⁶⁾と、ヘッセにとっては貴重な程の平穏な時である。というのもこの幸せはすぐに消滅してしまうから。妻のマリアは「病気でバーゼルに行ってしまう」(130)ヘッセは見舞いの為バーゼルと「世界の果て」⁷⁾の間を振り子のごとく行ったり来たりし、週に一回村の教師と、ピリアードをしにボートを漕いでシュテックボルンへ行くことが唯一の人間との交際である。マリアの病気はすでにこの新婚の時期に、ヘッセの将来を予感させるような雰囲気醸し出しているようだ。

その時歓喜と共に受け入れた『ペーター・カーメンチント』の成功を、結婚し新居を構えると同時に、「以前の金不足の状態が無くなると、素晴らしい自由の大部分も消えてしまった」(132)有名になると共に、絶えず何らかの先生から郵便が絶えることなく、献呈本を要求する郵便が届くようになり、「実際私は紛れもなく流行児で、決して望んでいないことだった」(132)と現実的なヘッセの一面が見え隠れする。有名になることに付随して、この作品の前に刊行されていた『真夜中後の一時間』も大いに売れたことに付言して「…あの本は探求と迷いの時代の失敗作で…」(131)と断言する。「もしも私が『カーメンチント』を匿名で出していたら…」(136)と今度は出版社からの講演の招聘にうんざりした気持ちの表現である。内容は異なるかもしれないが、『デミアン』を実際に匿名で出版しているのは、この辺りに伏線があるのだろうか。さ

らに „Allgemein Buchhändlerzeitung” のアンケートに答えて「…『カーメンチント』の不当な成功は…」(137) と、これらすべての発言は手紙であるが故に表白されたもの、と判断せざるを得ない。そして同時にヘッセに新たな一面を加えなければならない。これが結局、将来的には大きな不信と誤解を招く根源に繋がっていくのではないだろうか。

夜マリアが寝て、ヘッセが一人で起きているような時、風の音を聞いて思わず外に出たり、お産でマリアがバーゼルの病院へ行って、一人きりになると無性に「…放浪者になりたい、チゴイナーになりたい、隠者になりたい…」⁸⁾ という願望が、周辺が騒々しくなるのに反比例して強くなる。このようにヘッセは独立独歩の人、一匹狼、隠者というイメージが被せられている。前述のピリヤードのことや、求められてする講演旅行を嫌がる様が、人の輪の中に入ることを嫌うことと同義に受け取られているが、「チューリヒのあなたの家で、もう一度数時間を害のない集団の中に身を置くことが嬉しい。…長い集中的な孤独の欲求から再び人の声を聞いて、気持ちの良い至福な芸術的な雰囲気の中で…」(191) とか「家を売ろうと思う…そうすれば再び世の中に出て行ける、ミュンヘンやチューリヒへ」(203) ここに挙げられた移転先は大都会である、ヘッセが選択する場所としては到底納得できないけれど。これら周辺のこと、従来のヘッセに対する固定観念が揺らぐだけでなく、何か違和感さえ感じさせられる。

「…2・3の町をほっつき歩き、2・3日の間、夜にばかげた飲み歩きをする為の旅へ出掛けなければならない。そうすると人生の素晴らしさについて全く滑稽な感情が私を支配する。それをもしも表現できれば、私のへぼ詩作りは意味があるだろうに」(154) この言葉は何の変哲もない記述であるが、ヘッセを一言で言い表す言葉であろう。ヘッセは旅に出て人と交わることが、詩作の原点だと言っている。ヘッセにとって旅のイメージは極めて重要な働きをしている。これが、まさに詩人ヘッセを理解する為のキーワードであると言っても過

言ではないだろう。この言葉を発見できたことだけでも、この書簡集を読んだ甲斐があるような気がするほどである。さらにヘッセが店員としてチュービンゲンで働いていた時の親友ルドヴィヒ・フィンクが1905年ガイエンホーフェンに移転して、医者を開業することになった。無二の親友と言ってもよい二人の作家は隣人同士になり、仕事をしない時の大半は泳いだり、釣りをしたり、ボートでさまよったり、湖の周辺を散策したりした。「何という幸せだろう。口髭でピロードのジャンパーを着たフィンク。むら気ではない家庭の父、常にラインワインを手に、常に詩人とあてどなく考える準備のできているフィンク」⁹⁾ 孤独と寂寥感があまりにも前面に出てはいないだろうか。1905年に長男ブルーノが、1909年次男ハイナーが、1911年三男マルティンが誕生した。ハイナーはこの『ヘッセ書簡集』に「ハイナー・ヘッセの協力においてウルズラとフォルカー・ミヒェルスによって編集された」¹⁰⁾と表題に名前を連ねている。

長男から、家の中の捕虜にされたようで、子供というトランベツトや叫び声で仕事どころではない。¹¹⁾と別の意味で静かな家庭生活が営まれている。ブルーノが他所の子供の頭に石を投げたことが記され、「怒るつもりは無い」(vgl.182)というシーンは、母マリーの日記の4歳のヘッセが、石を投げたシーンと重なる。¹²⁾自分の経験を髣髴とさせ、我が子の成長を見遣る父親としての記述は、この時期のヘッセを取り巻く寂寥感を吹き飛ばすかのようなものである。このような正の面の記述が乏しいのは、家庭の中の負の面の大きさを自ずから物語っている。

ブルーノが誕生すると、今住んでいる古い農家の家は、今後長くは役立たないと判断し、ガイエンホーフェンに未練があるわけではないが、ここに土地を購入し、思うが俣の家の新築を決心する。1907年にこの村と湖を見下ろす丘に新居を構える。そこは浴室、水道、ワインケラー、写真家でもあるマリアのための暗室等を備えていた。

1914年3月にジフテリアの予防接種が基でマルティンが重症の床に伏せた。

この子の精神と肉体のひ弱さが、ヘッセ一家の将来を脅かす強い要因のひとつとなる。マルティンの極度の神経過敏症（母親譲り）と脳膜炎が合併して、施設に預けることを余儀なくされる。手がまわらなかったのだろうか、ハイナーはシャドリン家に預かってもらい、マリアは食事以外は片時もマルティンの側を離れない。こうして家族が離れ離れになり、すでに家庭の崩壊の兆しが伺われるようだ。

*

ヘッセはこのガイエンホーフエン時代に手紙だけでなく、数多くの訪問を受けると同時に、自らもまたしばしば訪問者になっている。この書簡集の相手方は芸術家と言ってもいろんな分野の人たちである。まず作家として Thomas Mann が居る。Mann とは 1904 年 Samuel Fischer の仲介で知り合うのだが、その時は互いに引き付けあうものが感じられず、距離を置いたものだった。1933 年ナチドイツを Mann が亡命した時親密になった。次にフランス人の Romain Rolland が居る。また Wilhelm Raabe の出身地 Braunschweig の町からヘッセが Wilhelm Raabe 賞を貰ったその Wilhelm Raabe、他に Alexander von Bernus、Bruno Frank、Wilhelm Schäfer、Emil Strauß、Ludwig Thoma そして Stefan Zweig たちが居る。画家の関係で Otto Blümel、Max Bucherer、Ludwig Renner、Frite Widmann そしてノルウェー人 Olaf Gulbrasson、スイス人 Cuno Amiet や Ferdinand Hodler アジア旅行に同伴した Hans Scharzenegger そして Albert Welti などが居る。あとからドイツ人 Guter Böhmer オーストリア人 Alfred Kubin スイス人 Louis Moilliet、Ernst Morgenthaler が加わる。音楽の方で Pasto La Roches、Alfred Schlenker、Ferruccio Bussoni、Hermann Suter、Justus Wetzels、Othmar Schoeck、Volkmar Andreae、Fritz Brun そして Edwin Fischer が居る。孤

独を愛するヘッセのこの交遊録である。

もしも妻のお産が順調に行けば「…そのあとしばらくの間この土地から居なくなる。連絡が取れなくなる。シンガポールへの乗車券を注文した」（194）とスイスの画家ストゥルツェネッガー同伴のアジア旅行を計画する。その行程は、まずスマトラへ行き、次にそこに居るスイス人の招待で、16万人の中国人の住むクアラルン・プールへ行き、当地原始林で蝶の採集をする。帰りはセイロンへ行き、事情が許せばインドに立ち寄るという計画である。両親が布教活動をしていたことを考慮すると、インドは特別な国のはずである（一番行ってみたい国ではなかっただろうか）。ところが実際に行ってみると、いろんな思惑とは関係なく、ホテル代が高すぎるという極めて素朴な理由で滞在できなかった。ヘッセの全般的印象として、中国民族は真の文化民族だという事が分かったというのだが、東洋という、西洋人にとってはエキゾチックな先入観も大いに作用していると思う。（vgl.204）この旅行の実感的な印象を「私が免れた熱帯の危険は次の3点に絞られる。つまり太陽（私は大変うまく耐えることができた）、マラリア（キニーネで対処した）そしてインドのホテル代（…私の場合後悔と帰郷の念を引き起こすきっかけになった）」（303）しかし赤痢と下痢に悩まされ「動くことも立つこともできず、横になっているだけですます体力を消耗し、ただ赤ワインとアヘンだけで生活した」¹⁵⁾ いずれにしてもインドのホテル代は一体幾らだったのだろう。

旅行から帰ったヘッセはかなり大きな旅のせいで、しばらくの間放心状態だった。何も手につかないようで「そう、私は数日前からまたここに帰っている。トランクはまだ開けられないままで置いてある。もしも私がトランクを開けて、中のもを取り出そうとすると、記憶の中や困った私のごたごたの中から全てのもが出て行ってしまうから。何だか気が抜けたようだ。赤道の太陽の下からボーデン湖の霧の中への帰還に何の満足も見出せなかった。もしも私の内臓が強靱で、インドのホテル代がより問題が無かったら、私はまだ長く滞在でき

たのに」(203) と思い出と後悔に浸る日々である。「インドのホテル代」が何度も登場するのは、ヘッセにとって大事件であるこのアジア旅行を、何人もの友人知人に報告し、その都度話題になったためと、この国がヘッセにとって如何に重要だったかを示唆するものであろう。

ヘッセが捕虜の世話でほとんど家庭を顧みる時間が無いという状態の中で、マリアがさらに重い坐骨神経症を患って、眠れない日々が続き、モルヒネを飲んだり温泉治療を受けても外出できるような体調にならず、子供を連れてサナトリウムの保養に出掛けると、ヘッセは一人残されるという生活の繰り返しである。1918年に姉のアデーレに現在の状態に、もうこれ以上耐えられないと言う意味の書簡を出している。「たとえば私は年月が過ぎていく中で、家庭をぼろぼろにされても、ひどく孤独にされても、この繋がりを良しと感じている」(298)この数ヶ月はマリアにとっても、ヘッセにとっても最も厳しい日々の連続だった。マリアの事件で、今までとは、まるで異なる状況になった。20日後の手紙によると、見舞って数時間側にいたが、良くなれば子供の世話ができるだろうが、そうならなければ彼女の人生は終わりだと、むしろ悲観的な見方に終始している。さらに姉に「あまり人に言わないで…」(381)と注文をつけながら、ヘッセ自身は何人かの友人に、この家庭内の出来事を話している。危うくなったマリアとの関係について先ず、「私の家庭は崩壊に瀕している…」(382)と気になる言葉である。一週間後に「私の妻は重い感情疾患だ。私の家庭はめっちゃめっちゃで、…」(384)一ヶ月後には「私の家庭は壊れている。妻は感情疾患で…子供はいない…私は戦うけれど困難だ」(385)年明けの1919年には「…方法として将来の為には離婚が必然で…」(388)続いて「いずれにせよ、私たちはいつかこの手段をとるつもりだ。なぜなら近々一緒に生活を再開する見込みは無いことが分かったから」(388)次にいよいよ離婚の決心が固まったことを伝えている。「…そのことに関しては、思い通りにできない。ミアの兄弟姉妹が何らかの加勢をするのか、私の敵の立場に立つのか分からない。なぜ

なら時と共に事態は離婚に向かうことは間違いないから、いずれにせよ二度とミアに再会しないという決意も固まっているから」(420)ヘッセが有名人ということもあって、離婚調停も捗らなく結局成立したのは1923年7月14日のことであった。

上述のマリアの事件でヘッセの結婚生活は終止符を打たれることになる。その事件とは、マリアとマルティンが電車で移動中に、突然マリアが荷物を窓から放り、子供をたたき始め、旅行者たちが仲に入って止め、ヘッセは彼らを出迎えはしたが途方に暮れ、友人に医者を紹介してもらい、そのままマリアを精神病院に入院させたことである。

手紙のマリアに関する記述を繋いでまとめてみると、ヘッセとマリアの相互の関係が明白になる。即ちマリアは結婚から離婚まで殆ど病気だった。ヘッセにとってさらに子供の病気も加わり、全く予期せぬ要素を抱え込み、生は次第に苦痛なものへと変わって行く。ヘッセは文学的には成功の一步を踏み出したものの、結婚に関しては未熟だった。しかしその経緯から、マリア以外の女性をパートナーに選ぶことはできなかつただろう。9歳年長というだけでなく、マリアは頑固で自己中心的で、ヘッセも同様、二人とも強い固定観念の持ち主だった。ヘッセ以外の誰もこの女性に合わせられる人はいないだろう。ヘッセは彼女に対して個性が強すぎ、マリアは彼にとって静かで控え目過ぎた。彼は彼女の人頼らないという態度に感情を害し、彼女は彼の移り気に感情を害した。致命的なことは彼の仕事に興味を示さなかつたことである。どちらも相手の欲求を消化できなかった。次第に二人はわが道を歩み始めた。結局二人の疎遠状態が元に戻ることは無かつた。マリアは家事に子供に音楽に打ち込み、彼は庭仕事と旅に増大する「不安のバルブ」を見出した。¹⁴⁾

*

ヘッセ自身に焦点を当てて、その生活全般を少し詳細に見てみたい。稿の目的とは少し外れるが、ヘッセの性格の一端を示すものと思われる記述がある。「私はガイエンホーフェンでタイプライターが打てる唯一の人間だ。…これ無しには何もできないだろう。…アメリカ製の良い物で、快適で5年の保証付で、スイスプレミア Nr4 という名前で 500 マルク…」(149) 思わず現代のパソコンと比較してしまいそうだ。1909年に『湯治客』を先取りする病気に罹っている。「私は2週間前からここバーデナウで湯治をしている。…起床すると温泉に入る。それから朝食を取る。次に1時まで散歩をしなければならない。1時に食事をし、4時まで横になる。それから夕方まで読書をしたり、書き物をしたりすることが許されている。…晩9時半に白いリンネルを着た少年が私の部屋に着て、麻布を冷たい水につけ私をくるみ、手のひらで疲れるまで叩く。…あなたも知っているように私は生まれつきシュヴァルトツヴァルトの人間である。そして私が子供の時、夏、私たちのところにきて、私たちが《空気を吸う人》と呼んでいた。たくさんの湯治客をよく不思議な思いと軽蔑の目で見っていた。そして今私自身《空気を吸う人》だ。…」(155) ヘッセはこの病を生涯引きずるのだが、湯治の様子を今しばらく見てみよう。湯治場の環境について、山、広い高い森の縁、羊歯の原生林、野イチゴ、とかげ、峡谷、眠ったように静かで金褐色の榛の木の茂みの中、これらすべてが自分一人のもので、毎日4~5時間戸外で過ごす中で、朝は静かな森の道をさまよい歩き、午後は怠惰な休息の中で夢を見、夜はWalter von der VogelweideやMörrikeを読む。何時間も何も考えず、樹幹や小川のさらさら言う音を聞くだけだ。(vgl.156ff)悠久の自然に囲まれて幸福感に、喜びに溢れて、むしろ積極的な闘病生活である。この時期が戦時中であるだけに、ヘッセの癒されている様子がより強力に伝わってくる。

1912年は転居のことが話題になっている。転居先をヘッセは故郷のシュヴァーベンで、マリアは子供をスイス人として育てたいため、故郷ベルンを主張する。頑固者同士の意見の衝突で、友人のハウプトマンが仲介をし、「あなたの中のスイス的なものと、シュヴァーベンのものを識別してみよう。35%がシュヴァーベンで、15%がスイスで、50%が識別不可能だが、かなりドイツ的志向が見受けられる」（172）些事にも仲介を要する例である。

1918年も気になる記述が目を引く。アデーレにマウルブロンを訪ねる思いを伝えている。読者の一人としてヘッセが生涯で、そこを訪ねることがあるのだろうか、常々思っていたから、驚いている。ヘッセにとってこの象徴的な場所が、もう風化してしまったのだろうか。現実のこととは思えないし、理解に苦しむ。ヘッセは何気なく、生徒たちにインドの話をしてやりたい、と言っている。その後、この計画が実現したかどうかは分からない。

また同年にはさらに重要な要素を孕んだ出来事が生じている。ヘッセは神経痛で電気治療を受けた。これは精神分析学に繋がるテーマを意味する。「私の中で危機が作られつつある。…私は電気治療を受けた。電気で暖められ、マッサージされ、ブラッシングされ、日向に寝かされた。…数週間来初めて良く眠った…」(324)ここに記されているのはただの治療の一部である。重要なのは医者である。ヘッセはこのサナトリウムの精神分析学者 Josef, B. Lang 医師を知ることになった。ラング医師は有名な C.G. Jung の弟子で、38歳のヘッセは5歳若い医師ラングに強烈な印象を植え付けられた。「彼は賢明で自身たっぷりて敏感でそれで居て控え目だ」¹⁵⁾ヘッセはこの私立病院で電気セラピーの他に12回の3時間の精神分析の治療を受けた。1916年6月から1917年12月まで60回の通院受診している。精神分析は内面への洞察と、自己認識と自己実現への洞察の原動力を提供してくれたとヘッセは考える。そしてこれまでヘッセという大地に繁った根っこを引き抜き、もう一度改めて、諸々の洞察を始める力を与えてくれた。つまりこれまでは十分に知り、行動しなかった。しかし今

後は全ての可能性を知りドラスティックに行動する決心をするようにした。内面を凝視し自己分析するようにした。新たな生を十分に備えた作品『クラインとヴァーグナー』についてのヘッセのコメントである。「私はここに移ってから毎晩掛かりっきりになっていた仕事を最近完成した。これは長編の物語で私が今までしてきた中で最善のものである。私の以前のやり方との決別であり全く新しいことの始まりである」(407)さらにヘッセの別の友人に宛てた手紙でやはりこの作品のコメントである。「良き友よ、あなたは二つの極の間、ある時は一方に、ある時は他方に傾きながら立っている。殺人の可能性は一方の極で、他方の極は親切と明晰な運命である。両者は存在しなければならない。そしてあなたに苦しみを望まない、しかし両方の極の一方に立ち止まることも望まない。殺人者は再三大声で苦しみながら、泥沼と暗い原生林に満ちた私たちの心の中の深みに警告する…」(422)この作品は精神分析の手法やそれに基づく心理描写が最も顕著に表れていることが、このヘッセのコメントに示されている。

真面目で善良な何の変哲も無い一市民のフリードリヒ・クラインが突然公金を横領し逃亡する。逃亡先は常に憧れていた南国イタリアである。もう一人の主人公ヴァーグナーは教師で家族全員を殺害する。クラインとの関係は、この事件が新聞に報道された時激しく犯人を非難したことが頭の片隅に残っていて、逃亡中にこの人物が意識に挙がってくる。精神分析の影響が見られるのは、クラインは実はヴァーグナーの行為を理解し自分も同様の犯罪を犯しかねないという予感のもとに、ヴァーグナーを非難したことである。それにより自分の行動を抑圧したのである。クラインとヴァーグナーは両極の存在である。一方は殺人鬼で一方は犯罪者ではあるが、外観はごく普通の市民で、むしろ殺人鬼とは真反対に位置する存在である。真面目、温和、誠実、教養という単語が当てはまる人物である。ここにまたトリックが隠されていて、クラインはこのような実直な男を演じながら、同時に公金横領という不誠実で破廉恥で、遊女に気

を示し、ヴァーグナーの行為さえ容認する。一方の極に対する他方の極という形態は、心理学的には自我の抑圧された反面を意味する。両者が存在しなければならぬというヘッセは、常に対極を置いて両極のハーモニーを模索する。またヴァーグナーはクラインの分身であることが明かされる。クラインの中のヴァーグナー的分身は少なくとも理性的な反面は消滅し、無意識的な行動をする。例えば、酒、賭博、遊女、麻薬のイメージである。善良な市民のクラインは抑圧されていた方の願望を満たす。人間の行動は必ずしも理性でなく無意識的なものが深く関わる。ここに分析学の体験が生きている。作品中の家庭崩壊も現実のヘッセの体験なのか。ヘッセはクラインを仲介にして自己認識と自己実現の曲がりくねった道を厳しく揺れ動きながら進むのだろう。

「ため息をつきながら、彼はこの考えを突き詰めて考えた。今になって見れば全く確かだと思われるのだが、あのことを始めて聞いた時すでに、心の中でヴァーグナーの殺害を理解し是認していた。もちろん可能なこととしてに過ぎないが、是認していた。すでに当時幾年も前、妻を愛しているとまだ思い、妻の愛を信じていたころ、すでに当時、彼の心の底では教師ヴァーグナーを理解し、恐るべき殺害に密かに賛成していた。あのころ彼が言ったり思ったりしたことは、常に彼の知性の意見であって、彼の心の意見ではなかった。彼の心一運命が生じてくる一番奥の根は—いつも別の意見をもち犯罪を理解し是認していた。いつもふたりのフリードリヒ・クラインがいた。目に見えるクラインと隠れたクライン、勤め人と犯罪人、家庭の父と人殺しが」⁶⁾

*

1914年のあの夏が来た。いわゆる大時代が始まった。第一次世界大戦が勃発した。約90年前の事件として現代人には、もはや風化してしまっているかもしれない。戦争と言う行為自体が風化すれば良いけれど、今も至る所で戦火

が上がっている。人間の本質的なものは如何なる時代でも、戦争と対戦争の当事者にとって全く不変だということを認識させられた。

この戦争の概略は、前段階のヨーロッパ大戦争がバルカン問題を直接の導火線とした。オーストリア＝ハンガリーのウィーン政府は同盟国ドイツの支援の基にセルヴィアと開戦する。次にセルヴィアを支援する旧ロシアが総動員令を発動し、ドイツは旧ロシアと開戦し、それまでの政治的いきさつからドイツはフランスに対して開戦し、ドイツ軍のベルギー侵略に対してイギリスがドイツに対して開戦する。¹⁷⁾

この大戦はヘッセを人間として芸術家として、内的、外的に存在の危機に陥れるもので、仕事や思考の根底を揺るがすものになった。戦争勃発と同時にドイツ国民としてベルンの領事館に兵役を志願した。この時はすでに国外で生活していたのだが、これも将来発生する、ヘッセに対する非難の根底に流れる伏線になっていることを忘れてはならない。「私は先日旧兵役経験者と当地の領事館で徴兵検査を受けた。志願兵として申し出たけれど採用されなかった」(244) 理由として、強度の近視と外国に居るということで、召集されたけれど、休暇兵という形で、つまり「…順番待ちのリストに載る…」¹⁸⁾、と言う形で猶予される。「私の番がくるまで長い時間が掛かるかもしれない…」(246) と言っている。友人、知人、村の人が皆参戦する中、ヘッセは自分だけ取り残されたような焦燥感に駆られて、番がこないのだから友人の支援団体に入れてもらって、役に立てるのなら何でもすると言ひ、職人的なその他の資質や教養は提供できないが、書くことやタイプはできるけれど速記はできない。外国語もだめだが旅行に使う程度の片言ならできると、自分を売り込んでいる。ヘッセは „Schwabenspiegel” と „Die Zeit” という新聞に、「負傷者への手紙」と題して「公開の手紙」の形式で論文を掲載した。「彼が Wilhelm Busch や Storm の小説を読もうと読みたいと、そんなことはどうでも良い、もしも彼を笑わせ、微笑ませることができれば、慰めることができれば、少しでも美し

さを、快適な響きを与えることができれば、そして日々を過ごすのを援助してもらえば、彼はその著者に感謝するだろう」（263）この中にヘッセの生涯のテーマである「ユーモア」の顔が覗いているのだが、捕虜への思いやりの強さが良く現れている。この思いは前線にどんなに望んでもいけない、ヘッセの後方支援としての戦争参加でもある「捕虜の世話」に直結するイメージである。戦争初期の積極的な参戦への願望が極めて短期間に変化しているのが、手紙の語調から読み取れる。「…しかし戦争が何か時間的なことと見なされても、また今戦っている国民の新たな共同の仕事と考えられねばならないとしても、それが政治的な未来の夢との戯れになってはならない。…要するにすべての思考する者は今、将来の像を創り上げようとしなければならない。…前線で農夫、労働者、学生、商人と知り合いになり尊重することを学んだ将校、また中隊で経営者のそばに立っていた労働者、また日夜農夫のそばで塹壕にしゃがんでいた教授、これらすべての人は後でまた別れ別れになってはならない…」（264）殆ど平和志向という論調である。同様に、傷ついて座している人も、研究室に座っている人もそれぞれ二つの道を歩まねばならない、つまり「浄化と試練の為の内面の道を、来るべき平和の作品の共同作業の準備の為の外面の道を…」（265）である。家族、身内が前線で生命を賭けて戦っているときに、このような周辺の事情がヘッセにとって正の働きする筈は無く、当然と思われるような事態に巻き込まれていくのだが、その伏線のひとつと考えられる。

このような戦時下にヘッセは全く状況には、関係も、何の脈絡も無い手紙を書いている。この錯綜とした時期のヘッセの複雑な内奥を表白したものであろうか。

„Vor meinem Fensterchen schieben die Wolken, dahinter
sieht man hin und wieder Schnee und Felsen.
Die andern sind ins Dorf hinunter und kaufen fürs
Nachtessen ein. Zwischenein muß ich die Kinder

Mit Zauberstückchen oder mit Verschen unterhalten.
Wunderbare Luft aber kalt.” (274)

1915年に注目すべき手紙がある。「今日私はドイツの新聞が私に対して、私があるオランダ人の作家に出した手紙の、ドイツは超国家的ヒューマニズムへの理想的な義務を断念しないだろう、と書いたことのために非難されている、と言う知らせを受け取った。この手紙はSven Lange宛ての手紙で8行も無い…」(290)まさか公開されると思わないし、内容的に特別の問題がある訳でもないし、ヘッセにとっては青天の霹靂である。この非難に対してヘッセが回答した内容を、J.Mileckはまるで揶揄するように「ヘッセの回答〔10月23日に „Kunstwart” (Dresden)の出版社に送られた公開の書簡〕感嘆するほどに温和で、いやそれどころか、まさに弁明一筋のものだった。彼は誤解されてしまった。Langeに対する彼の注釈の前半は皮肉だった。(自分を文学的に戦争に合わすことがうまく行かなかった…)、そして後半は賞讃だった。(ドイツが今武器だけで世界に感銘を与えるのではなく、何よりも平和術と超国家的ヒューマニズムの活動の中で感銘を与えてほしいと言うのが私の希望である)、にもかかわらず抵抗があった…」¹⁹⁾と紹介している。つまりヘッセはこの時期何を言っても誤解されてしまったのである。当時の世間の人はMileckのコメントの通りに受け取ったのである。一語一語の単語のもつ意味など全く無意味であった。従って採りようによっては、次のヘッセの言葉はまさに「弁明一筋」に尽きるのだろうか。„Neuen Züricher Zeitung”に1915年11月2日付けで非難に対する態度表明をしたものである。「これまで私の知らなかった „Körner Tageblatt”が10月24日付けで私個人に対する社説を論じた。それは私の最近の〈N.Z.Z.〉に印刷された論文に対して攻撃し、私の頭に〈卑怯者〉また〈責任逃れ〉と言う非難を投げつけた。…私はここでケルン紙の記事は粗野な完全に根拠の無い中傷であることを確認しておく。私の敵氏は大きな態度で、私より

年上で自由志願兵として Dehmel、Löns や他の人たちのような作家を引き合いにして、それに対して私は祖国を捨てた輩(原語通り)として…」(304 f)

ヘッセも Dehmel のように志願兵として届け出たが、捕虜の世話に集中するようにと帰休させられている。戦争より平和に価値を置くことの非難に対して、皇帝も同じことを言ったと反論し、暖炉のそばのテーブルに座っているケルンの人や他の記事を書く人は戦争を賞讃し、敵の肩を持つ人を卑怯者と嘲笑する。それはセンセーションを巻き起こそうと意図した言葉にすぎないだろう。(vgl. 305) また „Die Zeit” と „Morgen” に非難が掲載され、ヘッセは紙の浪費だ、と次元の低い反論で答えている。

戦争とヘッセを語るとき „O Freunde, nicht diese Töne!” なる論文を抜きにして語ることはできない。ヘッセは捕虜の世話に関する仕事に粉骨砕身の努力で望んでいるにもかかわらず、何の報いもなく、オランダ人に出した一通の手紙が公開されるや否や集中攻撃と非難を受けた。何故なのか。開戦直後に発表されたこの論文が伏線になっていることは十二分に考えられる。この時代にこのような論文を公開すれば賛同を受けられるはずは無いだろう。ヘッセの勇気もさることながら、思慮深く、冷静で、現実的なヘッセにはあまりに軽率な行為ではないだろうか。「今では書斎やアトリエの人々が、この点について意見を発表する慣わしがはびこっているので、私も尻込みしないで自分の意見を述べよう。私はドイツ人である。私の同情と願いはドイツに結びついている。だが私の言いたいことは戦争と政治ではなく中立者の立場と任務に関係している。といっても政治的に中立的な国民を指しているのではなく、研究者として、教師として、芸術家として、文学者として平和と人類の仕事に携わっている全ての人たちを指しているのである」²⁰⁾ このような論文を書く人が何故スイスに住んでいるのか。何故召集されたのに帰休しているのか。誰もが抱く素朴な疑問である。国を挙げて戦勝に向かって団結している最中に、この論文は水を差す役割しかしなかつただろう。開戦後二ヶ月という時期的な問題も軽

視できない。戦時中という異様な時期にヘッセは一人でドイツ国民の不信感を背負い込んでしまった。だからと言ってヘッセは間違ったことは一言も言っていない。結局ヘッセは戦争を拒絶し、同時に賛同する。内部矛盾に満ちて、この論文で何を言いたかったのか。すべてがあいまいなものになっている。「戦争と那些人たちの関係が義務の要求に対して、自発的な邪魔をされないリアクションをする人に属さない人、那些人たちの参加が協力と破壊に対する純粋な喜びに属さない人、そうではなくて心の不安な人、また心の定まらない人のタイプに属する人、また戦争を嫌悪するけれど、ドイツの勝利に感激するタイプに属する人。彼の頭と心は明らかに互いに一致していない」²¹⁾

この論文では「裏切り者」や「無定見」呼ばわりされ、ヘッセは大戦勃発と同時にこの汚名を着せられたにもかかわらず、堂々と新聞紙上で反論し、神経痛という持病には精神分析学を吸収して、人生だけでなく作風までも変えてしまい、外的、内的にどんな問題が生じようと自分の進むべき道をしっかりと踏まえていることが、プライベートの資料でより明確になった。ヘッセ研究家はこの時期を第二の危機と呼ぶけれど、いったい危機とは何かと問い返したくなる。つまりヘッセの危機は未来への飛翔の踏み台と言うことである。なぜならこの困難な時期を難なく乗り越えていることだけでなく、代表的な作品がこの時期に次々と発表されているから。「捕虜の世話」に邁進したことは集中的なジャーナリズムの攻撃に耐える手段のひとつであり、「旅」に精を出したのは家庭等の生活に関する困難に耐える為だった。

「なお一言、この戦争のもとで絶望的に悩んでいる多くの人々に、また今は戦争だということによってあらゆる文化と人間性が破壊されているように思う多くの人々に、訴えたい。人間の運命が知られるようになってから戦争は常にあった。戦争が無くなったと信じることには、何の根拠も無かった。長い平和の習慣がそう思い込ませたに過ぎなかった。人間の多数がゲーテ的な精神界に共に生きることができないかぎり、戦争はなくならないだろう。そうならない

かぎり、戦争はあるだろう。おそらく常にあるだろう。しかし戦争の克服は昔も今も、我々の最も高貴な目標であり、西洋的キリスト教的文化の最後の帰結である。悪疫に対する薬を求める科学者は、新しい伝染病に襲われても、研究を放棄しないだろう。ましてや、「地上の平和」と、善意を持っている人々の間の友情は、我々の最高の理想であることを、いつの日になってもやめないだろう。人間の文化は、動物的な衝動を精神的衝動に高めることによって、恥を知ることによって、空想によって、認識にとって、成立する。人生が生きるに値するということが、あらゆる芸術の究極の内容であり、慰めである。人生を賛美する人がみな死ななければならなかったとしても、愛は憎しみより高く、理解は怒りより高く、平和は戦争より気高いということ、そのことを、今度の不幸な世界戦争こそ、我々がかつて感じたより深く我々の心に焼き付けなければならない。その他に戦争はなんの役に立つだろう」²²⁾

注

主たるテキストは

Ursula und Volker Michels: Hermann Hesse Gesammelte Briefe Erster Band 1895-1921 Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1990 を使用し末尾にページ数を記す。

- 1) Adele Gundert: Marie Hesse D.Gundert Verlag Stuttgart 1953
- 2) Anni Carlsson und Volker Michels: Hermann Hesse-Thomas Mann Briefwechsel Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1999
- 3) Ninon Hesse: Lieber, lieber Vogel Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 2000
- 4) 拙稿 福岡大学人文論叢第 34 巻第 3 号平成 14 年 12 月 1561 ページ以下参照
- 5) vgl. Joseph Mileck: Hermann Hesse C. Bertelsmann Verlag München 1979 S.41
- 6) Stern Nr.28.3.7.2002 ELEFANTEN PRESS VERLAG S.74.

- 7) a.a.O.S.74
- 8) a.a.O.S.74
- 9) a.a.O.S.76
- 10) Ursula und Volker Michels a.a.O.
„In Zusammenarbeit mit Heiner Hesse herausgegeben von Ursula und Volker Michels”
- 11) vgl.a.a.O.S.76
- 12) Adele Hesse: Marie Hesse a.a.O.S.211
ヘルマンが石を投げた。私は彼を呼んだ。彼は遠くから叫んだ、ブタないで、ブタないで！ 叩かないから来なさい。…でもママ、ダビデも石を投げるのが好きだったよ。
- 13) Stern Nr.29.11.7.2002 a.a.O.S.70
- 14) vgl. Joseph Mileck a.a.O.S.42
- 15) Stern Nr.29.a.a.O.S.74
- 16) Volker Michels: Hermann Hesse Sämtliche Werke Band 8 Die Erzählungen
Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 2001 S.225
- 17) 林 健太郎『ドイツ史』山川出版社 昭和 54 年 356 ページ参照
- 18) Stern Nr.29 a.a.O.S.72
- 19) Joseph Mileck: Hermann Hesse a.a.O.S.69
- 20) Hermann Hesse: Gesammelte Schriften Siebenter Band Suhrkamp Verlag
Frankfurt am Main 1998 S.44f
- 21) Joseph Mileck: Hermann Hesse a.a.O.S.68
- 22) Hermann Hesse: Gesammelte Schriften a.a.O.S.49